

高齢者の場所への愛着と内側性： 岐阜県神岡町の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000262

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



高齢者の場所への愛着と内側性

—岐阜県神岡町の事例—

田原裕子・神谷浩夫

I 目的と視点	(2) 内側性の形成と場所への愛着
II 分析の枠組み	a 身体的内側性
III 調査の概要	b 社会的内側性
(1) 神岡町の概要	c 自伝的内側性
(2) 鉾山町神岡の高齢者の特性	(3) 住み続けを促すその他の要因
(3) 調査の方法と考察の手順	V 転居の要因
(4) 調査世帯の概要	VI 住み続けるための「適応戦略」
IV 高齢者の住み続けを促す要因	VII むすび
(1) 居住戦略	

キーワード：高齢者、住み続け、住み慣れた場所、内側性、神岡町、人口流出地域、人文主義地理学

I 目的と視点

本稿の目的は高齢者、とくにサラリーマン退職者世帯にとって住み慣れた場所に住み続けることの意味を、場所との関わりと高齢期の生活戦略の視点から検討することにある。周知のように今後は高齢者に占めるサラリーマン退職者の増加が予想されることから、従来の農村高齢者像とは異なる高齢者像を示すことは重要である。

「老梅は移すな」という言葉があるように、老後は慣れ親しんだ場所に住むほうがよいという意識は今でも根強い。また、老人保健福祉計

画¹⁾の中で高齢者が安心して住み続けることのできるまちづくりを謳った自治体が多いことからわかるように、住み続けることは高齢者福祉の基本方針でもある。実際、日本の高齢人口移動率は他の先進国と比べても低く、多くの高齢者が住み続けることを選択している³⁾。

だが、高齢者がなぜ住み続けるのか、あるいは住み続けることが望ましいとする根拠については十分な議論があるわけではない。従来、高齢期の移動は精神的、肉体的なダメージを引き起こすという「リロケーションエフェクト」仮説⁴⁾が経験的に信じられてきたが、近年の実証研究では移動の影響は状況によってプラスにもマ

1) 高齢者保健福祉十ヵ年戦略(1989)に示された目標を達成するため、1990年に各都道府県と市町村にそれぞれの地域の実情に応じた「老人保健福祉計画」の策定が義務付けられた。

2) 大原一興「高齢者住宅政策の視点」都市問題87-5, 1996, 19頁。

3) 1990年の国勢調査によると1985年から1990年の5年間に移動した高齢者は高齢人口全体の10.4%に過ぎない。高齢人口移動については、田原裕子・若垂雅子「高齢者はどこへ移動するか—高齢者の居住地移動研究の動向と移動流—」東京大学人文地理学研究13, 1999, 1-53頁。を参照。

4) 前田大作「老人のリロケーション・エフェクト」社会老年学16, 1982, 3-9頁。

イナスにも働く⁵⁾と報告されており、リロケーションエフェクト仮説は必ずしも支持されていない。

現実の社会に目を向けてみても、もはや住み続けることが当たり前と片付けるわけにはいなくなっている。晩年になって子どものもとへと引っ越す「呼び寄せ移動」⁶⁾は珍しいことではなくなり、サービス水準の高い自治体へと移動する「介護移住」⁷⁾の存在も指摘されている。加えて最近では都心部で次々と新築されている超高層マンションに高齢の入居者が少なくないことはマスコミでもたびたびとりあげられている。⁸⁾

こうした変化の根底には何があるのだろうか。ひとつには人と場所とのかかわり方の変化を指摘することができるだろう。工業化が進展する以前の社会では、高齢者にとって住み慣れた場所とは生まれた時から、あるいは結婚してからずっと関係性を積み重ねてきた場所、子どもや親戚が住む場所であり、老後の経済的安定や介護・支援を保障し、精神的な安心を保障する唯一の場所であった。そうした社会において住み続けることは当然であり、それ以外に選択肢はなかったといってもよいだろう。

だが、工業化の進展とそれともなう社会の変動はこれらの要素をばらばらに切断し、住み慣れた場所の意味や機能を変化させた。第一に親にとっての住み慣れた場所に子どもも継承して住むとは限らなくなった。このことは現在、

農山村に住んでいる後期高齢者(75歳以上)を思い浮かべれば明らかである。彼らは高度成長期には中年に達していたため、高度成長期における人口の産業・地域間移動の影響をあまり受けず、その多くが生まれ育った地域に残留した世代である。一方、彼らの子どもたちはまさに向都離村に代表される人口流動を生み出した世代にあたる。その結果、高度成長期から30年以上が経過した現在、年老いた親と子どもが遠く離れて別居するという状況が生み出されている。近年、大都市圏への人口流入は全国的にみればおさまっているが、地域内の雇用機会が不十分な過疎地域では若年層の流出が続いており、老親子の別居傾向は今後も続く⁹⁾と予想される。

第二に移転可能な所得である年金を受給することは、住み続けることの経済的な意味を縮小させる方向に働く。日本では昭和36(1961)年に国民皆年金制度が施行され、制度の充実がはかられてきたが、その恩恵を十分に享受できるようになったのは現在の前期高齢者(65~74歳)世代からである。皆年金制度がスタートした時点で20~30歳代だった彼らは退職までに年金受給に必要な加入期間を満たすことができた。しかもその多くが高度経済成長期に雇用労働者¹⁰⁾化したため、国民(基礎)年金と比べて支給額の高い被用者年金の受給者となった。その結果、年金を主たる収入源として生計を立てることができる最初の世代となる。そのため、それ以前

5) 安藤孝敏「地域老人における転居の影響に関する研究の動向」老年社会科学16, 1994, 59-65頁。

6) 「呼び寄せ移動」についてはマスコミ等で広く紹介されており、社会的関心は高い。しかし、高齢期の居住移動に関する体系的なデータが少ないため、正確な量については明らかになっていない。呼び寄せ移動の存在は次の文献でとりあげられている。(1)大友 篤「高齢期における居住移動の形態」都市問題90(12), 1999, 17-28頁。(2)清水浩昭「人口と家族の社会学」岸書房, 1986。

7) 「介護移住」についても正確な数字はわかっていないが、エイジング総合研究センター(2000)は江戸川区への転入理由に福祉サービスの充実を挙げる高齢者の割合が数年前に比べて上昇していると指摘している。エイジング総合研究センター「江戸川区高齢者・子育て世代の移動実態調査報告」, 2000。

8) こうした動きも定量的に捉えることは今のところ難しいが、高齢期における都心への居住地移動の可能性については日本でも早くから指摘されていた。例えば浜田学昭「大都市での高齢者居住環境政策の課題」都市問題研究38(9), 1986, 62-81頁, は「大都市生活享受府」と名づけ、郊外から都心への移動の増加を予測している。

9) 桑谷叔子「過疎地域の高齢者—鹿児島県下の実態と展望—」学文社, 1997, 3頁。

10) 高齢人口の職業経験の変化については次の文献に詳しい。阿藤 誠「現代人口学 少子高齢社会の基礎知識」日本評論社, 2000, 141-144頁。

の世代に比べると収入確保のために場所に縛られることがなくなり、その点で移動の自由を得たといつてよい。

第三に地域社会が変容する中で、従来、場所が暗黙のうちに果たしていた高齢者に対する支援機能も揺らいでいる。一般に地域社会が未成熟だといわれる郊外地域だけでなく、地縁と血縁によって結ばれた住民どうしの強いつながりが保たれていると考えられてきた農山村地域においてさえ、人口減少によって地域社会の機能が弱体化しつつあるといわれている。¹¹⁾

つまり高齢者にとって住み慣れた場所はかつてのように高齢期の生活に必要な条件をすべて満たす場所ではなくなったのである。にもかかわらず、今日でも多くの高齢者が住み続けているのはなぜだろうか。

ピギーによると高齢者は長距離移動者、短距離移動者と定住者に大別でき、長距離移動者は経済的、身体的に恵まれた層に多く、短距離移動者は逆に経済的に苦しく自立度の低い層に多く、両者の中間にあたる層には移動性の低い高齢者が多いという。¹²⁾ また、高齢者の居住地移動の要因については、経済的に余裕のある高齢者が生活の質の向上を目指して行う移動と、自立度が低い高齢者がサポートを得るために行う移動に大別できるといわれている。¹³⁾

このような居住地移動研究の視点に立つと、地域に住み続けることは移動したくても移動できない、あるいは移動する必要がないから住み続けるという位置付けになる。けれども実際に住み続けている高齢者たちは、自分を移動でき

ないから、移動する必要がないから住み続けていると位置付けてはいない。何らかの制約があって住み続けているという側面もあるにせよ、住み続けることに積極的な意味を見出している高齢者が多い。本稿が描き出したいのは、高齢者にとって住み続けることの積極的な意味であり、それが形成されるプロセスである。もし、住み続けることに積極的な意味があることが明らかになれば、高齢者の生活の質や主観的満足感を理解するための新たな視角が提示されることになる。これまで高齢者の生活の質や主観的満足感・幸福感は利用できるサービスや取り結んでいる社会関係との関係で説明されることが多かったが、本稿が試みる新たな分析視角によって、高齢者の生活の質や主観的満足感を規定する要因として場所との関係性も有効であることが明らかになるに違いない。こうした分析視角によって地理学的アプローチが高齢者研究に大きく貢献し得ることが示せるだろう。本稿はこうした視点に立ち、高齢者が住み続けることの意味を検討するが、そのための事例地域として岐阜県吉城郡神岡町を選んだ。

三井金属の屋台骨を背負ってきた神岡町では早くから雇用者化が進んだため、サラリーマン退職者が一般化したのも早い。しかも同社が戦時中から独自の企業年金制度を始めたため、現在の後期高齢者世代も含めて年金の受給水準は高く、収入確保のために場所に縛られずにすむ高齢者を多く生み出している。この点で神岡は一般的な過疎農山村とは明らかに異なる条件にあり、従来の農家高齢者像とは異なる新しい高

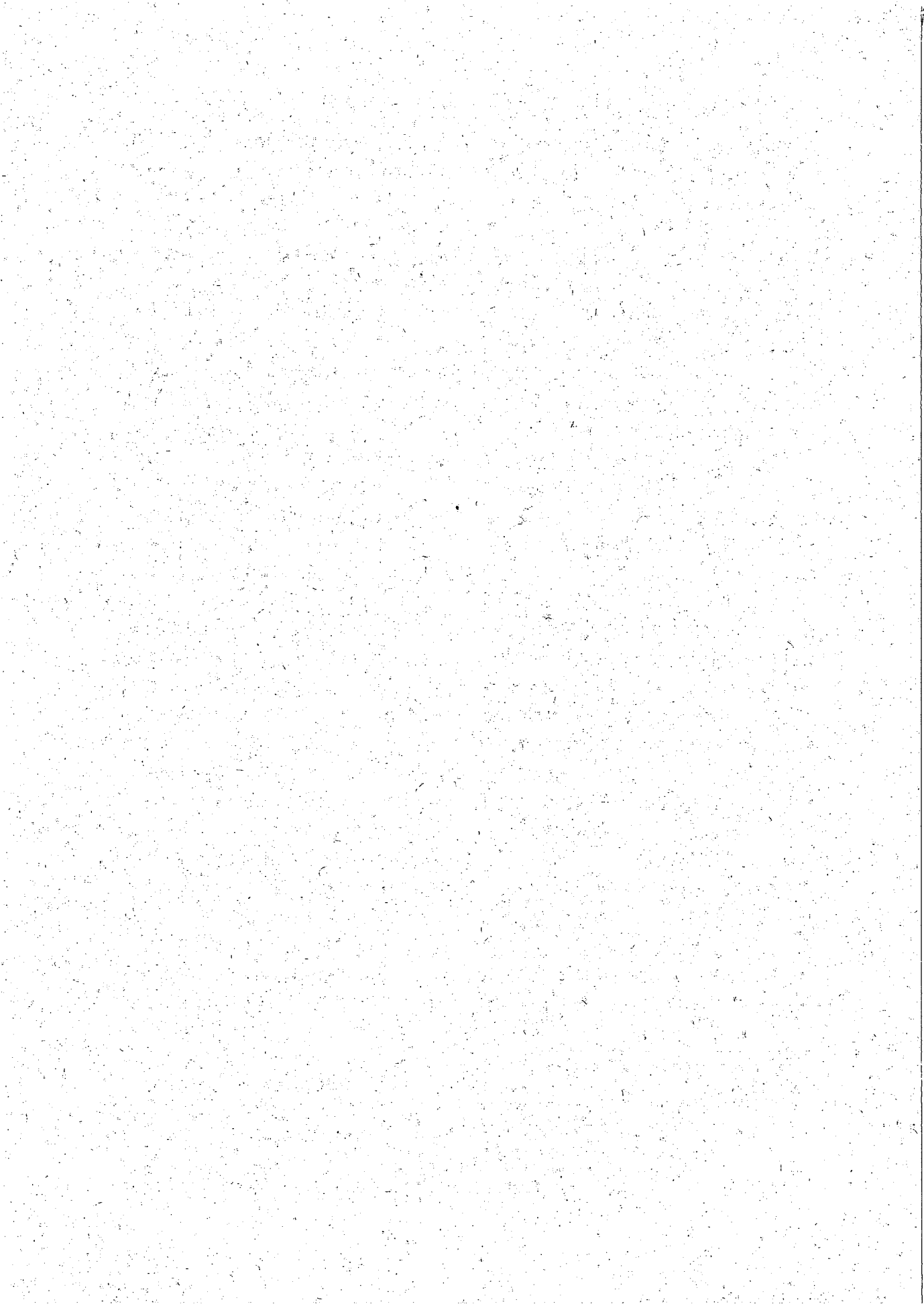
11) 山崎光博「高齢化に伴う農山村社会の変動」社会老年学31, 1990, 59-68頁。

12) Biggar, J. C., 'Who moved among the elderly, 1965-1970', *Research on Aging*, 2(1), 1980, pp. 73-91.

13) ① Serow, W. J., 'Why the elderly move: cross national comparisons', *Research on Aging*, 9(4), 1988, pp. 582-597.

② Litwak, E. and Longino, C. F., 'Migration patterns among the elderly: a developmental perspective', *The Gerontologist*, 25(3), 1987, pp. 266-272. など。②は高齢期の移動をライフコースの視点から分析し、退職前後のアメニティー移動(「第1の移動」)、日常生活に支障が出た段階でのサポートを求める移動(「第2の移動」)、重度の介護が必要になり、施設へ入居する移動(「第3の移動」)に分類している。第1の移動の典型がフロストベルトからサンベルトへの移動である。

14) 古谷野直・柴田 博・芳賀 博・須山靖男「生活満足度尺度の構造—主観的幸福感の多次元性とその測定—」老年社会科学11, 1989, 99-115頁。



15) 齢者像を描き出す上で参考になると思われる。

一方、昭和40年代以降、神岡町では基幹産業である鉱山の相次ぐ合理化によって過疎化と高齢化が同時に進行し、子どもと別居する高齢者世帯の割合が上昇した。子どもとの別居、地域社会の衰退、厳しい自然環境といった条件はいずれも過疎農山村に共通する問題であると同時に、高齢者の移動を促す条件でもある。そうした条件を数多く抱えながらも神岡町に住み続けている高齢者を対象とすることによって、住み続けることの意味を明瞭に浮かび上がらせるという本研究の目的が達成できるはずである。

II 分析の枠組み

本稿では高齢者が過疎地域に住み続けることの意味を検討するにあたって、ロールズの¹⁶⁾内側性の概念を援用する。彼は合衆国の中でも有数の衰退地域であるアパラチアを事例地域として、高齢者が住み慣れた場所を内側化することによって住み続けが促されるという仮説を提示した。その手法は人文主義地理学の立場から十数人の高齢者に対して詳細な聞き取り調査を重ねることによって、高齢者の生活世界と生きられた経験に迫り、その中から高齢者と場所との関わりを読み取ろうとするものである。人文主義的な地理学研究的の多くが、どちらかといえば現代社会におけるプレイスネス化の進行を背景に、場所の真正性・偽物性を明らかにすることや、真正な場所を創造するためのプランニングに注目

してきたのに対して、¹⁷⁾ロールズの実証研究は内側化の過程や状況、内側性が人間の生活に与える影響を描き出している点で特徴的である。彼は住み続けを促す主な要因を高齢者と場所との親密な結びつきによって生じる場所への愛着に求め、愛着がいかんに形成されるかに因して、レルフの内側性の概念や¹⁸⁾シーモンのボディサブジェクト、場所のバレエの概念を¹⁹⁾援用しながら説明している。

ロールズによると高齢者の場所に対する内側性は3つの側面に類型化されるという。第1に、ある場所の物理的環境を熟知し、ボディアウェアネスを獲得している状態を指して身体的内側性と呼ぶ。これはシーモンのボディサブジェクトと同じ意味に使われている。第2に、地域社会の一員であるという認識がアイデンティティと深く関わっているような状況が社会的内側性である。第3に、人生そのものと場所が分かちがたく結びついている状況を指して自伝的内側性と名づけている。

次に彼はこうした場所の内側化によって場所に対する愛着が形成されると説明する。例えば、場所を身体的に内側化することによって、高齢者は加齢による身体的、精神的な衰えを補うことができる。そのため、他の場所ではだめでも、「ここ」でなら自立した生活を続けられるという気持ちになり、「ここ」に対する愛着が生じるという。同様に社会的に内側化した場所では、価値観を同じくする高齢者グループの一員とし

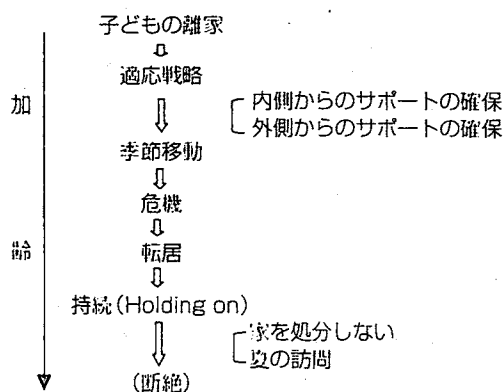
- 15) むろん、以下で述べるように神岡の高齢者の大半は地元出身者であり、サラリーマン退職者の多くが進学や就職を機にふるさとを離れ移住した経験を持つ現在の大都市圏地域とも状況が異なる。しかし、大都市圏で生まれ育ったいわゆる郊外第二、第三世代の割合が上昇していることを考えると、将来的には大都市圏においても地元出身の高齢者が増加することは想像に難くない。
- 16) ① Rowles, G. D., *Prisoners of space? Exploring the geographical experience of older people*, Westview, 1978. ② Rowles, G. D., 'Growing Old "Inside": Aging and Attachment to Place in an Appalachian Community' (Danton N. and Lohmann N. eds., *Transitions of aging*, Academic Press, 1980) pp. 153-170. ③ Rowles, G. D., 'Between worlds: a relocation dilemma for the Appalachian elderly', *International Journal of Aging and Human Development*, 17(4), 1986, pp. 301-314.
- 17) ① Buttimer, A., 'Home, reach and the sense of place' (Buttimer, A. and Seamon, D. eds., *The human experience of space and place*, Croom-Helm, 1980) pp. 166-187. ② Seamon, D., *A geography of the lifeworld. Movement, rest and encounter*, St. Martin's Press, 1979. ③ Relph, E., *Place and placeness*, Pion, 1976.
- 18) 前掲17) ③
- 19) 前掲17) ②

て精神的な安らぎを得ることができる。また、自伝的内側性を形成した場所においては、場所や風景が思い出に結びついているため、そこに立てば若くて健康だった頃の自分を思い出すことができ、肉体的、精神的に衰えていく高齢期には何よりのなぐさめとなる。つまり、住み慣れた場所とはこうした安らぎやなぐさめに満ちた場所であり、そのために愛着が生まれ、住み続けることが積極的な意味を持つようになると説明するのである。

もちろん、こうした場所と高齢者との親密な関係にもかかわらず、本人や周囲の環境の変化によって住み続けが困難になる段階が訪れる。ロールズは高齢者がさまざまな危機に直面し、やがて転居せざるを得なくなるプロセスについても注目し、住み続けと転居の間でのジレンマを切り口にモデルを提示している(第1図)。

ジレンマモデルによると、高齢者は、地域の内外からのサポートを使い分けることによって子どもと離れて住む状況に適応する。これが「適応戦略」である。地域内のサポートとしては、近所の友人や知人によって提供されるちょっとしたお使いや緊急時の連絡などに加えて、高齢者どうしの交流も重要である。一方、地域外に住む子どもたちは、たびたび電話で話すことで精神的なサポートを提供すると同時に、年に何回かやってきて日ごろ高齢者の手に余るような用事を片付けることで住み続けに貢献する。

しかし、本人か配偶者に慢性的な障害が発生したり、配偶者と死別するという危機が生じ、自立した生活が困難になる時が訪れる。はじめは厳しい冬の間だけ子どもの家に身を寄せ、春になると地元に戻るといった季節移動が中心だが、やがて子どもの家に定住するようになる。だが、肉体的には二度と戻ることができなくなっても、



第1図 リロケーションジレンマ
Figure 1. Relocation dilemma.

資料 前掲16) ③より作成

多くの場合、感情的なつながりは死ぬまで途切れることはない。帰る見込みのない家を処分しない高齢者が多いのは家がそうしたつながりの証であり、自分自身の人生の象徴であるからだという。

いうまでもなく高齢者を取り巻く環境は社会によって異なる以上、ロールズが描き出したパラチアの高齢者の愛着のあり方や生活戦略が日本の過疎地域に住む高齢者のそれとまったく同じということはありません。しかし、住み慣れた場所への愛着と子どもと同居することとの間のジレンマという視点は、社会の違いを超えて日本の高齢者を分析する上でも有効であると思われる²⁰⁾。

また、ロールズの研究のような人文主義地理学のアプローチには、解釈の妥当性を担保することや検証の困難さ、インフォーマントの選択の恣意性といった観点からの批判がつきまとう。しかし、必ずしも合理的とは言いがたい、ジレンマに満ちた複雑な高齢者の生活戦略を分析するためには、まず、その基盤にある高齢者の生活世界を可能な限りありのままに理解すること

20) 九州地域計画研究所『高齢者はなぜふるさとを離れたのか』, 1996。では、「親が心配でたまらないから目が届くところに来て欲しい」という子どもの気持ちと「生まれ育った、知り合いも多い田舎に残っていたい」という気持ちとの間で板ばさみになって揺れ動く高齢者の実態を描き出しており、本稿で強調するジレンマの視点と共通する部分が多い。

が重要であり、それには高齢者の語る「生きられた経験」に耳を傾ける必要がある。人文主義地理学のアプローチの守備範囲を仮説の提示におくとすれば、上述の方法論的限界は必ずしも致命的な問題とはなるまい。²¹⁾

こうした点を踏まえて本稿は内側性が場所への愛着と住み続けをもたらしことを検証するための前段階として、ロールズの仮説が日本の過疎地域の高齢者の住み続けを説明する際にも適用し得るという可能性を提示することを目標におく。

本研究では16世帯29人の高齢者に対して詳細な聞き取り調査を行い、そこで得られた高齢者の言葉を主たる素材として、場所に対する愛着がどのように形成され、それが身体的に衰えていく過程の中で住み続けるという意思決定とどのように結びついているのかについて読み取っていく。Ⅳ章ではまず、場所が内側化される過程について身体的内側性、社会的内側性、自伝的内側性の3つの側面から検討する。一方Ⅴ章では、場所への愛着を抱きながらも転出を覚悟せざるを得なくなる要因について考察する。Ⅵ章では「適応戦略」、すなわち身体的な衰えに伴う住み続けの不安と場所への愛着とのジレンマの中で、高齢者ができるだけ長くその場所に住み続けるために実行している工夫を検討していく。

考察全体を通して、高齢者が語る言葉を引用するように努めた。これは、高齢者の生きられた経験をより具体的に示すことで、読み手である読者の、主観的な経験への共感を促すため

ある。このことと関連して、調査対象者はすべて仮名を用いて紹介している。記号で示すよりも個人を生き生きと描き出せると判断したため、ロールズの研究においても同じ方法がとられている。

Ⅲ 調査の概要

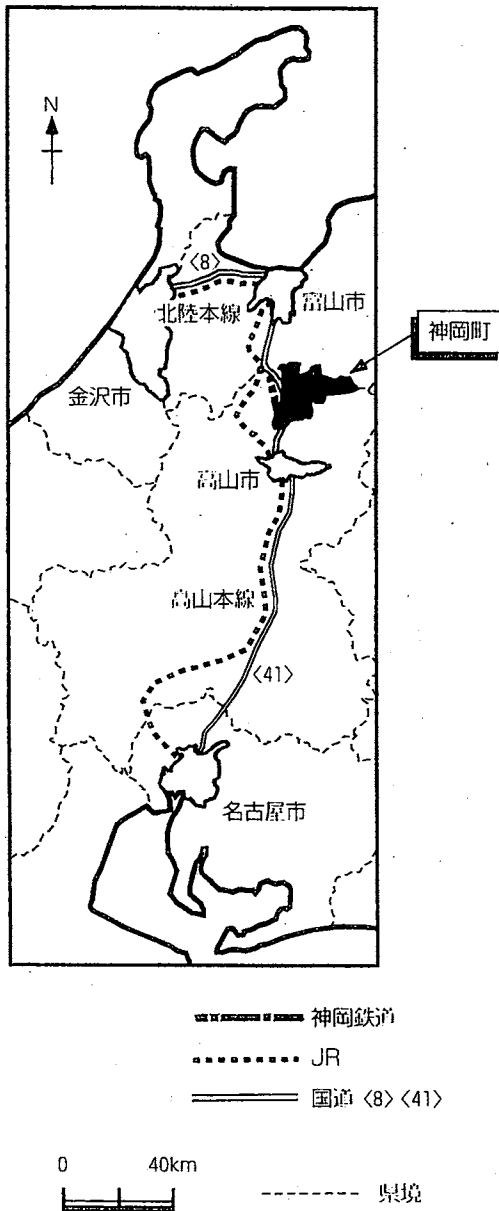
(1)神岡町の概要 事例地域として取り上げたのは、岐阜県吉城郡神岡町の船津地区である(第2図)。神岡町は岐阜県と富山県の県境に位置し、高山市と富山市からほぼ50km弱の距離にある。JR高山線からは外れているものの、第三セクターの神岡鉄道によって高山線の猪谷駅と結ばれている。また、富山市と高山市を結ぶ国道41号線が町内を貫いており、町の中心部からは高山方面や富山方面へのバスが日に何本か運行されている。

神岡町は1950年に旧船津町と旧阿曾布村、旧袖川村が合併して町制を施行した。その地形は高原川と山田川が合流してできた谷を山が取り囲んでいることからすり鉢²²⁾に例えられることが多く、底にあたる旧船津町を旧2村が取り囲んでいる。すり鉢の底という言葉からイメージされたとおり船津地区の市街地は半径1kmほどの狭さであるが、1999年時点で町全体の約7割にあたる2,968世帯8,172人が居住しており、町民は今でもこの範囲を指して「まち」と呼んでいる。細かくみるとCBDおよび古くからの住宅地からなる旧市街地と、比較的新しく形成された郊外住宅地に分かれており、各種のサービス施設や公共施設は1km四方にも満たない旧

21) Warnes, A. M., 'Geographical perspectives on aging' (Warnes, A. M. ed., *Geographical perspective on the elderly*, John Wiley & Sons Ltd, 1982), pp. 1-31. は、個人に注目するロールズの研究に対して、実証の難しさ、概念化の努力の必要性などの批判を挙げつつも、高齢者の経験を鮮明に描き出し、仮説の構築に有効であるとして一定の評価を与えている。

22) 厳密には旧船津町には本稿でいう船津地区のほかに割石以北地区と呼ばれる地域も含まれる。船津地区からみると富山側に位置し、高原川沿いのわずかな河岸段丘上に集落が点在している。もともと農業条件が悪い地域で人口も少なかったが、鉱山最盛期に坑口と鉱山関連の発電所が立地し、それにあわせて杜宅もつくられた。だが、閉山に伴って人口が激減し、現在は全人口の4%を占めるに過ぎない。

23) 住民基本台帳(1999年3月)より。



第2図 神岡町の位置
Figure 2. Location of Kamioka Town.

市街地に集中している（第3図）。

（2）鉱山町神岡の高齢者の特性 神岡町の基幹産業である鉱業が最盛期を迎えたのは戦前から1960年代にかけてである。1960年には町の人

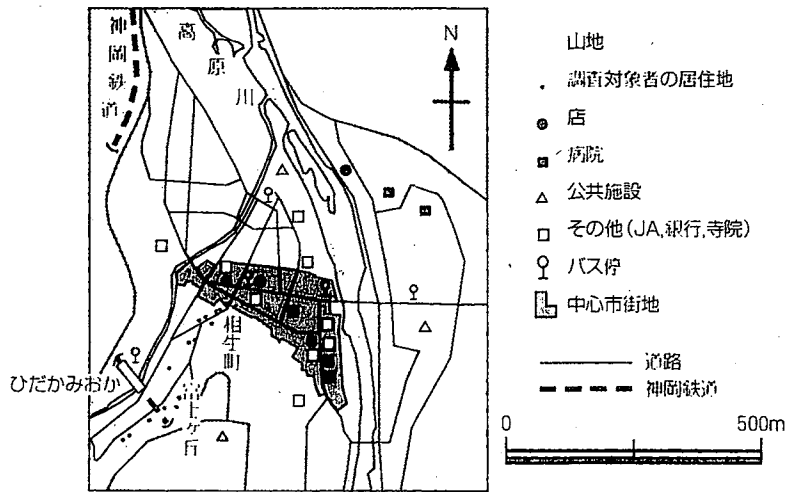
口は2.8万人に達し、そのうち4千人を鉱山社・職員が占めていた。当時は2千戸余りの社宅に家族を含め約1万人が暮らしていたという。だが、1970年代以降は相次ぐ合理化に伴って鉱山関連の雇用のみならず、町の人口も急激な減少を続け、2000年現在で鉱山の社員数は500人を割り、人口も1万人にまで減っている。

大企業の鉱山町としての繁栄と衰退の歴史は、今日でも高齢者の生活を規定する隠れた要因となっている。第1に、現在の高齢者世代は他の世代と比べてコーホート規模が突出している（第4図）。これには鉱山の最盛期が彼らの働き盛りの時期と重なったことが大きく影響している。第5図に示したように、1940～44年生まれコーホート以降は大学進学や初就職期にあたる10代後半から20代前半でコーホート規模が大きく縮小した後、20代後半で若干の盛り返しを示し、その後は年齢の上昇に伴って微減するという過疎地域に典型的なパターンを描いているのに対して、現在の高齢者世代にあたる1925～29年、1930～34年生まれコーホートはそれぞれ30～34歳、25～29歳をピークに持ち、その後は減少するというカーブを描く。これは戦時中から終戦直後にかけて、神岡を離れていたこの世代が、鉱山最盛期にUターンし、その後、鉱山の合理化に伴って徐々に転出していったことを示すものである。とはいえ、一般に合理化においては既存雇用者の削減よりも新規採用の縮小・停止が優先されるため、現在の高齢者世代のほうが後の世代よりも神岡に滞留する機会に恵まれた。その結果、第4図のような人口ピラミッドが描かれることになった。

第2に、神岡町は1万人の町民に対して3つの病院と8つの診療所を有し、医療資源が豊富である²⁵⁾。これはかつて町営病院とは別に鉱山関係者のために鉱山病院が設けられていたためで、

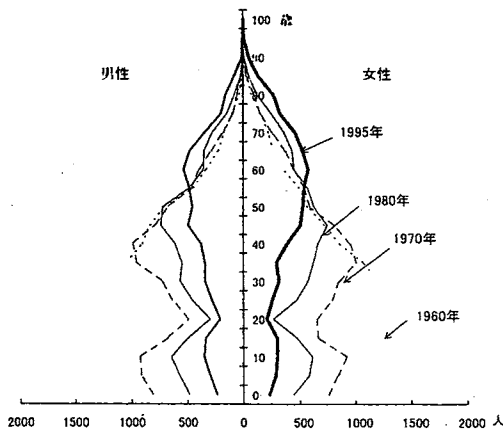
24) 神岡鉱業労働組合『鉱山とともに50年』1999年。および神岡鉱業での聞き取りによる。

25) 町勢要覧（平成10年度版）による。



第3図 市街地の様子

Figure 3. Activity space of the sample households in Kamika Town.



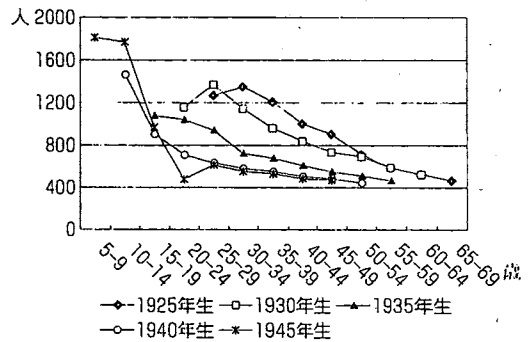
第4図 神岡町の人口ピラミッドの推移

Figure 4. Population pyramid in Kamika Town.

資料 国勢調査

合理化に伴って鉾山病院の経営は町に移管され、現在は高齢者医療に特化した療養型医療施設に転換されている。いざという時にすぐに入院できる病院の存在は高齢者に安心感を与えている。

第3に、後期高齢者を含め、高水準の年金受給者が多い点が挙げられる。三井金属では国民皆年金制度が始まるはるか以前の昭和17年から企業年金制度が発足していたため、鉾山退職者の厚生年金受給額はおしなべて高い。危険を伴



第5図 生年コーホート別人口動態(男性)

Figure 5. Population trends by cohort (male).

資料 国勢調査

う坑内業務に比べれば給与水準が低かった坑外社・職員でも年間3百万円程度の年金を受給している。これは同世代の農家高齢者の世帯と比べると2倍か、それ以上にあたる金額である。鉾山の資料や役場の聞き取りによると、現在の高齢者の少なくとも1割は鉾山退職者が占めているようである。とくに本稿が調査対象地域とした船津地区では高齢者の約2割が鉾山退職者であるといわれており、配偶者や遺族まで含めれば、かなりの割合の高齢者が高水準の厚生年金の恩恵を受けている勘定になる。

(3)調査の方法 本研究では高齢者の社会関係、日常的な活動とその空間、経済的な状況およびライフヒストリーについて詳しい聞き取りが必要となるため、多数の対象者を得ることは難しい。そこで限られた量の情報を有効に活用するため、事前の作業として統計資料や神岡町が実施した既存の調査データを用いて調査地域を選定した。具体的には本研究の主旨に照らして鉱山退職者の割合が低い町丁²⁶⁾、高齢化率が低い町丁²⁷⁾、子どもとの同居世帯の割合が高い町丁²⁸⁾を除いた結果、CBDに近接する旧市街地の3町丁(相生一丁目、二丁目、富士が丘)が残り、その中から子どもと同居していない高齢者世帯を中心に協力を依頼し、最終的に16世帯から回答²⁹⁾を得た。

現地調査は1999年8月と2000年2月に2回の訪問面接を実施し、一部の世帯については2001年9月に補足調査³⁰⁾を行った。1回の訪問に1.5~2時間、多い場合で3時間程度をかけた。同一の対象者に対して複数回の面接を行ったのは、「生きられた経験」を感じるままに語ってもらい、できる限りそれに近づくためであり、ロールズも同様の方法をとっている。1回目の訪問ではライフヒストリー、健康状態、社会関係や社会的活動の状況などの基本的な属性を押さえた上で、「将来の希望」「神岡に対する意識や神岡に住んでいることへの感想」「生きがいや楽しみ」などを簡単に尋ねた。2回目以降の訪問では、「将来の希望」などについてできるかぎ

り自由に話してもらった。夏と冬の2回の面接を通じて同じ話題を取り上げたことによって、高齢者が持っている生活世界を他者に語る際にゆらぎが少ないことをほぼ確認できた。

(4)調査世帯の概要 分析に先立って調査対象とした16世帯29人の基本属性を紹介しておこう(第1表)。

世帯構成は子どもと同居していない世帯が13世帯(夫婦のみ世帯3、一人暮らし世帯10)、子どもと同居している世帯が3世帯(三世帯同居世帯2、独身子との同居世帯1)である。子どもと同居していない世帯のうち、子どものいない世帯は3世帯で、あとの10世帯は子どもはいるが同居していない世帯である。このうち子どもが少なくとも1人は町内に住んでいるのは2世帯だけで、それ以外の8世帯は子どもが全員町外に住んでいる。8世帯中、4世帯は高山・北陸方面に住んでいる子どもが少なくとも1人はいるが、あとの4世帯は一番近くに住んでいる子どもでも東京か大阪となっている。もっともほとんどの高齢者が地元出身なので、きょうだいか甥、姪など近しい親戚が近くに住んでいる。

現役時代の職業については、世帯主が鉱山に勤務していた世帯が9世帯ともっとも多く、それ以外も教員、看護婦など勤め人が中心である。したがって現在は1人を除いて全員が厚生・共済年金など被用者年金、またはその遺族年金を受給しており、経済的にはゆとりのある人が多い。唯一、基礎年金のみを受給している女性は

26) 神岡鉱業での聞き取りによると、町内の退職者の多くは「まち」に住んでいる。船津地区の中では郊外の新興住宅地や、CBDを除く旧市街地に多い。

27) 住民台帳(1999年3月時点)によると、船津地区の高齢化率は28.1%で、町丁によってばらつきがある。本稿がとりあげた相生町(35.9%)と富士見ヶ丘(29.1%)は平均よりやや高い地域である。

28) 神岡町が実施した高齢者調査(平成10年度)によると、船津地区では高齢者のいる世帯のうち単身世帯が10.5%、夫婦のみ世帯が36.3%を占め、両者をあわせると半数近い。子どもと同居していない世帯の割合は旧市街地の町丁でとくに高く、相生町では48.6%、富士見ヶ丘では76.9%に達する。

29) これは対象地域の高齢者世帯の32%、単独・夫婦のみ世帯の57%にあたる。

30) この他に、調査以外の期間には手紙のやり取りによって調査対象者とのラポールを継続している。

31) 一般に鉱山は定年退職年齢が早い、神岡の場合は合理化の影響もあって50歳台前半で定年を迎えた人も少なくない。そのため夫の定年退職前後から妻がパートに出るケースもあり、結果として妻本人名義の厚生年金の受給につながっている。

第1表 調査世帯の基本属性と居住戦略
Table 1. Attributes and residential strategies of the sample households.

氏名	年齢	職歴	年金など	世帯構成	最も近くに住む子ども	居住戦略
田中 周蔵 魚	73 74	鉱山 主婦	厚生	夫婦	船津	自立
村山 隆 タツ	— 85	会社経営 会社事務	遺族厚生+国民・厚生+音楽	一人	近所	自立
松井 誠一 文子	78 71	鉱山 主婦	厚生	夫婦	富山	自立
中林 一郎 洋子	— 66	鉱山 パート	遺族厚生+厚生	一人	高山	呼び寄せ同居
山口 和夫 美子	77 —	鉱山 —	厚生	三世帯	同居	同居
大野 正 敬子	— 70	鉱山 主婦	遺族厚生+国民+その他	独身子と同居	同居	同居
岡村 昭治 栄子	69 67	鉱山 看護婦	厚生+厚生	夫婦	金沢	自立
森 千鶴	78	高校事務	共済	一人	なし	自立
坂上 清子	78	病院勤務	厚生	一人	なし	自立
原田 研一 昌代	72 69	鉱山 事務員	厚生+厚生	一人	埼玉	自立
関本 昇 津子	— 84	鉱山 主婦(茶道教授)	遺族厚生+国民	一人	金沢	地元同居
山野 信一 和子	— 74	教員 主婦	遺族共済	一人	なし	自立
川合 直 まつ	— 77	職業軍人 看護婦	恩給+厚生	一人	大阪	自立
宮本 幸一 瑞江	— 68	鉱山 パート	遺族厚生+国民	一人	東京	自立
佐野 行夫 はつ	— 83	農業など パート	国民	三世帯	同居	同居
藤田 和夫 秀子	75 —	議員 —	共済など	一人	神奈川	呼び寄せ同居

聞き取りにより作成。名前はすべて仮名。年齢は1999年当時、—は死亡。

子どもと同居しており、年金の半分を食費として子どもに渡し、残りの半分を自分の小遣いとしている。

表では省略したが、健康状態については何らかの持病を抱えていたとしても日常的な生活には支障のない高齢者が多く、介護や介助が必要なのは2人だけである。いずれも妻と2人暮らしの男性で、1人は入院中(原田さん)、もう1人が自宅療養中(岡村さん)である。

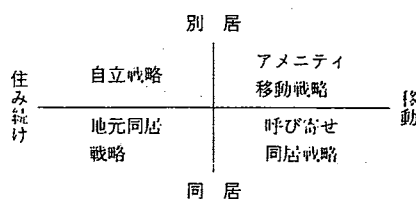
また、来歴については本人または配偶者の生家に住み続けている世帯が16世帯中7世帯にのぼる。それ以外でも、本人または配偶者の少なくとも一方は近所ないし船津地区出身という世帯がほとんどで、夫婦ともに船津以外の出身の世帯は1世帯(藤田さん)だけである。したがって本研究の分析対象は生まれてから、あるいは結婚してからずっと今の場所に住み続けている高齢者が中心となる。

IV 高齢者の住み続けを促す要因

(1)居住戦略 まず、それぞれの高齢者が当面、どのような住まい方を予定しているのか、基本的な心積もりについて触れておこう。本稿ではこれを「居住戦略」と呼ぶ。「居住戦略」の分析にあたっては、今後も神岡に住み続けたいかどうかと、子どもと同居しているかどうかを軸として4つに類型化した(第6図)。子どもとの同・別居を軸に加えたのは、それによって住み続けるための条件が異なると考えたからである。調査では「健康な間」「配偶者が自分が介護や介助が必要になった場合」「配偶者と死別した場合」「子どもが退職したら」など、具体的な状況についてそれぞれ答えてもらい、その内容を総合して類型にあてはめた。

第1表に示したように、子どもと同居している世帯、子どもが町内に住んでいる世帯、および子どものいない世帯では、できるだけ長く現在の生活を続けた上で、死ぬまで町内に住み続けたいと考えている点で共通する。いよいよ介護が必要になった時に子どもに面倒をみてもらうか、施設に入所するかはわからないが、いずれにせよ町内に住み続ける意向である。

一方、子どもが遠方に住んでいる世帯の場合は、将来の予定が立てにくく、戦略が分かれる。すでに戦略が決まっているのは8世帯中3世帯で、2世帯が「呼び寄せ同居戦略」、1世帯が子どもの退職Uターンによる「地元同居戦略」を予定している。これらはいずれも配偶者と死別した一人暮らしの世帯である。最終的な戦略が確定していない5世帯については、できるだけ長く今の状態を続けたいと考えてはいるものの、本人や配偶者が病気になったり、死亡した時のことは予定が立たないというのが本音



第6図 居住戦略の類型
Figure 6. Types of residential strategies.

である。

とはいえ、自立した生活が可能な間に限るならば、明瞭に転出を予定しているのは「呼び寄せ同居戦略」の2世帯だけで、残りの14世帯は子どもの居住地にかかわらず、できるだけ長く住み続けることを希望している。

以下では聞き取りの中で語られた「生活世界」の状況をロールズが提示した内側性、ジレンマ、適応戦略などの概念にあてはめて解釈することによって、高齢者が住み続けることを希望する要因を検討していく。

(2)内側性の形成と場所への愛着 ロールズはある場所に愛着を感じ、その場所から離れることに抵抗を覚えるのは、その場所に対して3つの内側性、すなわち身体的内側性、社会的内側性、自伝的内側性を形成しているからであるという。ここではまず、高齢者によって語られた日常生活の様子や意識を内側性の概念にあてはめて解釈してみよう。

a 身体的内側性 神岡はCBDが狭い上に川によって分断されているという特徴を持つ。そのため、船津地区の住民が日常的に外出する範囲は狭い空間であり、また外出の道順も橋の位置によって制約を受けるため単調になりやすい(第3図)。その結果、住民は毎日のように同じ道を通り、同じ場所に繰り返し出かけることになる。こうした繰り返しがボディアウェアネ

32) 関 孝敏「低成長期における高齢化と世帯戦略—北海道余市郡赤井川村の高齢者世帯—」(熊谷文枝編著『日本の家族と地域性(上)』ミネルヴァ書房, 1997) 73-90頁。は、北海道の過疎農村をフィールドとして高齢者世帯が住み続けるための戦略を分析し、子どもとの同・別居によって戦略や条件が異なることを明らかにしている。

スをもたらし、身体的内側性を形成していると考えられることができるだろう。

もっとも、住宅地はすり鉢の斜面に延びているため、中心部に向かう道は坂になっており、場所によっては急傾斜もある。「雪の朝に急いで歩いていたら、坂のところでひっくり返って腰をしたたか打ってしまい、しばらく歩けなかった」という経験をもつ高齢者もいる。このほかにも橋が滑りやすくて危ない、中心商店街に車が多いので歩きにくいという感覚を持っている高齢者は多く、必ずしも物理的に歩きやすい街として評価されているわけではない。

けれども、坂道で転んだ清子さんも「転んではからが雪が降ったらそろーりそろーり歩くように気をつけているのもう大丈夫」と言い、坂の途中に住む瑞江さんは「いつも歩いているからかしら。なんとも思わない」と言う。彼女らの言葉からは、身体的に内側化された場所であれば、どこにどのような危険が潜んでいるのか、天候や自分の体調が及ぼす小さな変化まで含めて熟知しているので不安を感じずに外出できていることがうかがえる。

逆に身体的に内側化していない場所に出かけることへの抵抗について、敬子さんは次のように語る。

「最近では神岡にも高山や富山のお店の広告がたくさん入るようになって、若い人らは車で出かけてますよ。私も運転はできますけど、そっちのほうにはほとんど行きません。高山も富山もいくたびに様子が変わっちゃって、どこがどうなっているかわからないから」。

敬子さんの言葉から読み取れるように、身体的に内側化されていない場所に外出する時は、

道順や場所の確認が必要である上、道路の状態や車の往来などにも気を配らなくてはならない。足腰が弱いだけでなく、視覚や聴覚も鈍ってきている高齢者にとって馴染みのない場所への外出は常に緊張を強いられるため、億劫になるのは当然といえよう。神岡の市街地は急峻な山地に囲まれ、周辺部でロードサイド型の商業・サービス業や住宅の開発が困難なため、DIDを持つ他地域に比べて市街地の中に商店や住宅が比較的維持されている。そのため、空き店舗や空き家が増えているとはいえ、市街地の家並みは20年前とほとんど変化していない³³⁾。こうしたことも、高齢者が身体的内側性を維持するのに寄与しているものと思われる。

そしてこうした感覚が「神岡でなら、まだまだ自立した生活が続けられる」という意識につながっていることは、大阪に住む一人息子と離れて暮らす77歳のまつさんの言葉から読み取ることができる。

「すり鉢の底みたいに狭い街でしょ。雪も降りますしね。ですけど、なんでも近くにあつて、住むには案外便利なんですよ。……将来のことは息子が決めることですから（大阪に引き取るつもりなのかどうか）わかりませんが、まだまだ体が動きますしね。がんばれるうちはここでがんばりますよ」。

b 社会的内側性 「神岡の人はたいてい、同級会か、親戚か、近所か、職場か、どこかでみんなつながってるんです。だからわりと住みいいんだと思いますよ」。(まつさん)「看護婦だったってこともあるんでしょうけど、どこに行ってもたいがい知っている人がいますからね。そういうところを離れるということは、今のと

33) 1983年の住宅地図と現在とを比べても、市街地の範囲はほとんど拡大しておらず、公共施設の位置にも変化がみられない。20年間に生じた変化は、市街地の車側を走る国道471号線にバイパスが完成し、その沿線にコンビニが1軒、ホームセンターが1軒、道の駅が立地したことくらいである。これらの店舗は市街地の衰退を加速させるほどの影響力を持っておらず、また市街地に住む高齢者の徒歩圏外にある。なお、商業統計表によると、神岡町内の商店数は1985年から1999年の間に295から198に減っている。また、DIDの人口も1985年から1995年の間に7,805人から6,113人に減っており、衰退傾向が読み取れる。だが、人口1万人に対して小売業商店数200という値は、同規模のほかの町村と比較すると大きいほうである。

ころ考えられませんね。(栄子さん)「ここにいれば「元議員」ということで、周りもそれなりに尊重してくれますからね。……やはり神岡にいるほうがやりいいってことはありますね。(藤田さん)。

ロールズはその場所の地域社会に属していると感じ、そのこと自体が個人のアイデンティティにつながるような状態を指して社会的内側性と名付けている。上で紹介したような「神岡ではどこかでみんなつながっている」「どこに行ってもたいがい知っている人がいる」「周りが尊重してくれる」という感覚は、まさに社会的内側性にあたるだろう。そして社会的に内側化することによって「そういうところを離れることは考えられない」「神岡にいるほうがやりいい」という言葉で表現されるような、神岡に対する愛着が生じていると理解できる。

ロールズによると、高齢者の社会的内側性の形成にとってもっとも重要なのは「高齢者の社会(society of the old)」,つまり高齢者どうしのつながりである。同じ時代を同じ場所で過ごした高齢者どうしは価値観や生活様式を共有できるため、お互いの存在そのものが愛着の源泉となるからである。また、年老いた現在の姿だけでなく、若かった頃のことを知っている人の存在が精神的な支えとなる点からも高齢者どうしのつながりは重要であるという。確かに栄子さんや藤田さんの言葉からも現役時代の活躍を知る人々の存在が神岡に対する愛着につながっていることが読み取れる。

まつさんの言葉にあらわれているように、神岡にも共に生きてきた高齢者どうしからなる「高齢者の社会」が存在している。「高齢者の社会」は近隣、昔の同僚、同級生、趣味のグループを通じた友人、祝儀などさまざまなつながりによって重層的に構成されているが、ここでは神岡の高齢者の多くがもっとも大切なつながりの一つとして意識している同級会を例に、「高齢者の社会」が社会的内側性の形成にどのように働きかけているかについて紹介することしよう。³⁴⁾

同級会とは学校別・学年別に結成される卒業生の会であり、神岡では若い世代も含め、すべての学年で同級会が結成されている。³⁵⁾同級会の活動がもっとも盛んになるのは時間に余裕ができ、かつ健康にも恵まれている60歳代～70歳代前半の高齢前期であるが、若年～中年世代でも盆や正月には必ずといっていいほど同級会の集まりがもたれている。

高齢者については、「まち」に住む人のほとんど全員が船津尋常小学校の同学年で構成される同級会に実質的に関わっている。³⁶⁾調査対象とした29人のうち、町内のほかの小学校を卒業した男性1人を除いて、残り全員がいずれかの同級会に所属している。同級会の活動がもっとも盛んになる60歳代～70歳代前半では、どの同級会も新年会と春秋の旅行会(日帰り～1泊程度)を必ず実施しており、これに忘年会やスポーツ大会などが加わるのが普通である。

同級生全員からなる全体会に加えて、親しい

34) 高齢者が参加する社会組織としては町内会、老人クラブなども有名だが、それらの「官製的」組織への実質的な参加率は必ずしも高くない。とくに事例地域の場合はほとんどの高齢者が実質的に参加する組織として同級会が存在するため、こちらをとりあげた。

35) 例えば「同級会」活動の大きな行事の1つに厄年の旅行がある。そのために33歳くらいから準備を始める。

36) 同級生のつながりは強いが、排他的ではないため、町外から嫁いできた女性でも希望すれば夫の同級会にはいったり、近所に同学年の女性がいる場合にはその人の紹介で自分の学年の同級会にはいることができる。町内の女学校や町外の中学校を卒業した人は、そこでも同級会に入っているものの、小学校の同級会に比べると個人的な友人関係としての性格が強い。また、同じ神岡町内の周辺集落や隣接する国府町、上室村にも同級会は存在するが、その活動は船津地区ほどは活発ではない。そうした違いは船津地区の高齢者が余暇活動に参加できるだけの経済的ゆとりをもっていることと無縁ではないだろう。例えば同じ町内の山之村地区では多くの高齢者が年金収入を補うために高冷地野菜のパートに従事しているため、「まち」に比べると同級会活動は低調である。

友人どうして数人～十人程度の小グループにまとまり、ドライブや食事に出かけている人も多い。同級会が町内にある趣味や習い事のサークルのきっかけにもなっている。

70歳代も後半になると体調を崩したり、亡くなる人が増えるので公式な活動は下火になるが、体が動く者は同級会の代表としてお見舞や葬儀に出席することになる。

「ここ2、3年は同級会も開店休業状態ですね。それでも同級生のお見舞に行ったり、葬式に行けば、『また会ったな』で、会う機会は多いんですよ。最近はその同級会がわりになっています」。(松井さん)

このように同級会の活動やつきあいはかなり頻繁に行われているが、³⁷⁾「わずらわしい」「あまり参加していない」という意見は聞かれなかった。高齢者の同級会に対する想いは岡村さんの次の言葉に代表されるのだろう。

「同級生は小学校のときからずっと一緒に生きてきた仲間なのだから、大事にしなくてはいけない。(足が不自由なのでほとんど外出もできない状況だが)同級会だけは何かあっても出かけるものだ」³⁸⁾

また、こうした同級会をはじめとする高齢者どうしのつながりは精神的な絆としてだけでなく、実質的なサポートの供給源としても機能している。

「夫が風呂場で亡くなったもので、とにかく引っぱり出さなくっちゃというので、すぐに近所の〇×さんに電話をかけて、手伝ってもらったんですよ。近所に何でも話せる同世代の友人がいてくれるのは本当にありがたいと思いますね」。(柴子さん)³⁹⁾

「夫が入所している施設は不便なところであって、バス停から遠いので雪が降るとバスでは行けないんです。毎週のことだからいつもタクシーというわけにもいかないし、困ってたんですけどね。その話を同級生にしたら、どうせ時間は余っていて、やることもないからといって、毎週送り迎えしてくれることになったんですよ。もちろんガンソリン代くらいは払ってますけど」。(呂代さん)

これらの事例から「高齢者の社会」の中でさまざまな手段のサポートが状況に応じて授受されていることが読み取れ、そのことが神岡に住むことへの安心感を生み、愛着につながっていると想像される。

ところで、高齢者どうしのつながりは毎日の生活を通じて積み重ねられている。市街地が空間的に狭いため、買い物や用事に出るついでに友人の家に立ち寄ることもできるし、わざわざ訪問しなくてもスーパーや商店街に行けば、友人や知り合いに会えるからである。買い物することだけが目的であれば毎日出かける必要はないのだが、友人や知り合いに会うためにわざわざ外出しているという人も多い。

「健康のために毎日、買い物に行くことにしているんですけど、行くと誰かしらに会うのでこっちでおしゃべり、あっちで立ち話してしているとつい時間が経ってしまっ」。(文子さん)

すでに述べたように場所が身体的に内側化されていると外出が苦になりにくいのが、外出して人と会うことによって社会的内側性が強化されるようである。一方、場所の社会的内側化は生活必需的な外出だけでなく、余暇的な外出をも

37) 例えば昭和17年卒業(昭和5、6年生まれ)の「とひち会」の場合、主な年間行事として新年宴会、春の日帰り旅行、ビヤパーティー、グランドゴルフ大会を実施、会報も年4回発行している。役員会や見聞いなども含めると総行事数は年間33日にもなる。

38) 2000年2月の調査でこのように語ってくれた岡村順治さんは、この年の12月に亡くなった。亡くなる直前の秋には、足が悪いのでこの数年は遠慮していた同級会の旅行会に「今回はどうしても」と言ってでかけたそうである。

39) 柴子さんは異外出者であるが、この友人の紹介で同級会にも参加している。

促すため、外出頻度が高まり、結果として身体的内側性が強められる可能性は高い。この点についてロールズは身体的内側性と社会的内側性は相互に強めあうという仮説を提示している。

c 自伝的内側性 自伝的内側性は、人と場所との最も深い結びつきとしてロールズが位置付けているものである。高齢者にとって住み慣れた場所は、現実にも今、存在する物理的環境としてだけでなく、思い出が積み重なった場所としての側面もある。すなわち、人生のさまざまな出来事と場所のモザイクによって構成されているのが住み慣れた場所（生かれた場所 lived in place）であり、個々の場所に立てば自分の一生におけるさまざまな出来事が思い出される。そのことが場所への愛着をもたらす、場所と結びついてアイデンティティが形成される。このように長い時間をかけて場所の経験を積み重ねることで形成される、高齢者の存在そのものが場所の一部であるような関係をロールズは自伝的内側性と呼び、シーモンは実存的内部性と名付けた。

「お泊りはどちらですか。ああ、△△旅館ね。あそこの角を曲がったところにはんこやさんがあるでしょ。今もあると思いますよ。あそこの裏に同級生の実家があったんですよ」。 (瑞江さん)

「西里橋ね。あれ昔は木でできていてね。その頃は上流にダムがなかったから水も深くて速くて、子どもの頃はあそこからよく飛び込んで遊んだんですよ」。 (田中さん)

こうした発言からわかるように、神岡の高齢者たちもさまざまな場所に対して、友人の家があった場所、昔よく遊んだ場所、自分や子どもが通った学校、職場があった場所というようにライフヒストリーに根ざした個人的な意味を付与している。そうすることによって、例えば瑞江さんがある場所を今はもう住んでいない昔の同級生の家の近所として認識し続けているよう

に、現実には個々の場所との結びつきが途切れたとしても、気持ちの上ではつながりが継続され、馴染みのある場所として認識され続けるようである。

また、このようなライフヒストリーに根ざした場所の意味付けは個々の場所だけでなく、神岡に対する評価・イメージにも関わっている。

「私が若かった頃は反対側の山の斜面にも社宅があって、人がたくさん住んでいて、夜になると明かりが煌々ともって、そりゃあきれいでしたよ」

「あの頃は町の人口も2万人を超えていて、市になろうかってくらいで。街もにぎやかでしたよ。芸者が何百人といたっていうんだから。」

「その頃は映画の封切りともなると、神岡が県内で一番早かったもんです。美空ひばりのコンサートなんかを呼んだのも神岡だけだったと思いますよ。」

これらは聞き取りをした高齢者が異口同音に発したコメントである。往時の繁栄にもとづいて神岡を評価することが、神岡に住み続けるという選択に対する肯定的な態度につながっているとは考えられないだろうか。しかも鉱山最盛期に働き盛りだった彼らには、その繁栄は自分たちがつくりあげたという自負があり、往時の町の繁栄を自らのアイデンティティに結びつけているようにも見受けられる。

一方、このような高齢者たちの認識に対して40代、50代の現役世代には「私らは鉱山が華やかだった時代のことは知らないですよ。年寄りから聞くだけで……」「年寄りには集まっては『昔はよかった、華やかだった』と言ってるみたいですけどねえ」と、冷静な人が多い。いきおい過去の神岡に関する場所の記憶は同級生をはじめとする高齢者どうしの付き合いを通じて共有され、維持されることになる。こうした状況は、自伝的内側性は社会的内側性によって強

化されるというロールズの仮説と符合する。

(3) 住み続けを促すその他の要因 ここではロールズ概念からはいったん離れ、場所に対する愛着以外に住み続けを促している要因についても簡単に整理しておこう。まず、住み続けることによる経済的な合理性は見逃せない。先述したように調査対象者のほとんどが厚生年金をはじめとする移転可能な収入によって生計を立てているので、収入の面で神岡に拘束される理由はないが、持ち家に住むことは住宅コストを低減できる点で合理的な選択といえる。持ち家を売却した資金をもとに転出する方法もあるが、家を処分することには抵抗のある人が多いうえ、それほど高い価格で売却できるわけではないことも売却に踏み切れない理由となっているようである。娘が2人とも嫁いで東京に住んでいる瑞江さんは言う。

「いくらでもお金があつて、好きなところに住めるといふなら別ですけど、このあたりの方はそこまでの余裕はないですよ、普通。うちも娘は近くに住むようにと一言してくれるんですけど、私が借りられる程度となるとせいぜいアパートになってしまいますでしょ。そんなところに住むくらいだったら、この家で広々と暮らすほうがいいですよ」。

また、庭などで畑仕事ができることへの評価も高い。どの世帯も家庭菜園の域を出ず、経済的には種や肥料代の持ち出しの方が多く、「お金を描いているようなもの」という世帯ばかりだが、「畑に行っている分にはたいしたお金もかからないし、体にもいいし、作物を育てることは楽しいので、趣味としては上等」で、「子どもの家に行くともそれできなくなる」と言う。

加えて家族との折り合いが高齢者の転出を踏みとどまらせる要因として働くこともある。将来の同居を見越して、子どもが家を建てる際に

資金援助した藤田さんも転居の時期については述べている。

「体が動かなくなってから引き取ってくれとといったって、向こうも迷惑なだけだろうから体が動くうちに移ったほうがいいと思うんですよ。ただ、向こうには向こうのやり方があるし、こっちも元気なうちはこっちのやり方があるから、潮時が難しい」。

実際に高齢者の中には、いったん子どもの家に移ったものの、気に入らずに処分しないままにしてあった家に戻ってきた人や、家を処分してしまったので戻るに戻れず、借家を探している人もいる。そうした先例を共有することによっても自立化戦略の選択が促されているようである。

V 転居の要因

これまでに紹介した高齢者のように神岡に住み続けることに積極的な高齢者がいる一方で、住み続けることに消極的、あるいは積極的に転出を希望する高齢者もいる。住民台帳の転出記録によると、1999年度には32人、2000年度には27人の高齢者が町外に転出している。町内の高齢人口の1%弱にあたる高齢者が毎年、町外へ転出している勘定になる⁴⁰⁾。

調査対象者について言えば、16世帯29人のうち、2世帯2人が「呼び寄せ同居戦略」を選択し、近い将来に神岡からの転出を予定している。転出の理由について、藤田さんは親子は同居するのが当然だから、洋子さんは介護が必要になったら子どもと住む方がよいからと考えており、どちらも子どもが神岡にUターンする可能性がない以上、自分が転居するしかないと心構えをしている。介護の必要性や子どもとの同居規範は神岡に限らず、子どもと離れて住む日本の高齢者の多くに共通する転居の理由であるが、

40) 転出記録からは転出の理由はわからないが、向年度に神岡から転出した計59人中10人が特別介護老人ホームや老人保健施設などへ移動している。

同様の状況はロールズのアパチア研究でも報告されており、身体的な衰えによる自立性の低下と、それによって子どもに心配をかけることへの遠慮が転居の最大の理由であるという。

また、具体的に転居を意識するようになる背景には、自分を取り巻く周囲の社会的環境が変化していることへの不安もあるようだ。

「このあたりも昔みたいではなくなりましたよ。昔は近所付き合いが盛んで、若い人もたくさん住んでいて安心でしたけど。最近では若い人は出て行ってしまいうし、お年寄りも亡くなるし、どんどん人が少なくなってますよ。〇×さんも出て行っちゃったし、△〇さんのところもないですよ。そのうち町内会がなくなっちゃうんじゃないかって、心配」。(洋子さん)

彼女の不安はロールズが指摘する近隣の「見守り (visual surveillance)⁴¹⁾」機能を想起させる。民家が軒を連ねる船津地区では、近くなって雪が掃いてなかったり、いつまでも新聞がとりこまれていなければ、近所の人々がすぐに気がついて様子を見に来てくれるので、一人暮らしでも安心である。だが、日中、家にいて自分のことを気にかけてくれる同世代の人が周囲から徐々に減っていく状況に直面すると、そうした安心感も揺らぎ、転居するのも仕方がないという気持ちに傾くようである。

さらに、はじめにも述べたように気候の悪さは高齢者の転出を促す主要な要因⁴²⁾であり、神岡でも雪の苦勞が転居を促すきっかけとなっている。

「うちの弟はね、数年前に雪がいやだっていって出て行っちゃったんですよ。弟だけじゃなくて、鉱山に勤めていた人なんかには、退職金で雪の少ない中京方面に家を買って出て行った人が何人もいって聞きますよ」。(清子さん)

すでに移動した人や移動を検討している人だ

けでなく、住み続けを希望している人にとっても雪の問題は深刻であり、将来、住み続けることをあきらめる時がくるとしたら、雪下ろしができなくなる時だろうという人が多い。北アルプスに連なる神岡町では標高の低い船津地区でも例年1mほどの積雪があり、冬の間に1、2回は雪下ろしをしなくてはならない。高齢化が進んだ地域ではお金を払っても人手を確保するのは容易ではなく、悩みの種になっている。

VI 住み続けるための「適応戦略」

前章で指摘したように神岡の高齢者は子どもとの別居、将来の介護への不安、冬の厳しさといった転出を促す要因を意識しながらも、その多くが神岡にとどまっている。そこには住居の制約や経済的制約、あるいは家族との折り合いなど何らかの制約要因があるにせよ、神岡に住み続けることに積極的な意味を見出していることはⅢ章で述べたとおりである。こうした姿はロールズが描き出した「ジレンマ」、すなわち子どもの近くに住みたいという気持ちと住み慣れた場所に住み続けたいという気持ちの葛藤と重なる。

Ⅱ章で紹介したように「ジレンマ」モデルは自立性の低下に伴って高齢者の気持ちが住み続けから転出(子どもとの近居)へと徐々に傾いていくプロセスを整理したものである。そして転出に至るまでの期間を快適に過ごし、その時期をできる限り遅らせるための努力が「適応戦略」であり、その中心は地域社会の内外から必要なサポートを確保することにある。本章では神岡の高齢者の「適応戦略」について検討することにしよう。

はじめに雪への対応については、神岡では女性も雪下ろしをするのが当たり前なので、健康なうちは一人暮らしでもそれほど問題となっ

41) 前掲16) ③ 307頁。

42) 前掲13) ②, 16) ①-③。

いないが、健康の衰えとともに人に頼らざるを得なくなる。雪下ろしを頼む人は近所に住む親戚が中心だが、隣近所や同級生、あるいは息子の同級生が気にかけてくれるというケースもあり、多岐にわたっている。事故が起きた時に困るので地元の業者に頼んでいる人や、別居していても高山くらいの距離であれば見計らって子どもが下ろしに来てくれるので間に合うという人もいる。

雪下ろし以外に日常的なレベルでサポートを必要とする場面は少ないが、モビリティについては不便に感じている人が多い。市街地が狭く、毎日の生活に必要なものはみな徒歩圏内にあるため、普段は問題がないが、病人を病院へ連れて行ったり、ちょっと遠出しようというときには公共交通機関では限界がある。そうした時に最も頼りになるのは、昌代さんのケースで紹介したように近くに住む同世代の親戚や同級生であって、若い世代はたとえ子どもが近くに住んでいてもあまり頼りにされていない。

「夫が遠くの病院に入院していた時には、息子が嫁が送ってくればどんなに楽かと思いましたよ。でも、平日は仕事があるから忙しいといわれれば、迷惑をかけるのはいやですからねえ」。(タツさん)

一方、高いところの電球の取り替え、ふすまや障子の張り替えなど、高齢者が自分でやるのは難しいが人にも頼みにくいという用事も発生する。雪下ろしほど差し迫っておらず、頻度も少ないこの種の用事については、別居子によるサポートが期待されている。別居子の訪問頻度は居住地によって差があり、東京、大阪など遠方に住んでいる子どもの場合は年に1、2回の帰省が標準であるが⁴³⁾、こうした用事を片付ける分には年に1、2回の訪問でも十分である。

「電球の交換なんかはお婿さんが来た時にま

とめて頼むんですよ。来てくれるのは年に2回くらいですけど、別に困ることはないですね」。(洋子さん)

別居子はまた、具体的なサポートを提供するだけでなく、頻繁に電話をかけ合うことで精神的な支えとしても機能している。多い人（一人暮らしの母親と娘）で1日おきというケースから、少ない人（一人暮らしの父親と息子）でも月に1回程度は電話をかけ合い、おしゃべりに興じたり、近況報告や相談事をしている。

さらに子どもの訪問を待つだけでなく、高齢者自身も遊びや避寒、病気の療養などさまざまな理由で子どもの家を訪ね、交流している。次に紹介するケースは子どもの居住地にある程度なじんでいるために、いつでも行けるという安心感が得られ、かえって住み続けたが促されることを示唆している。

「大阪の家のことはよく知っていますよ。向こうの家族（嫁の家族）のこともよく知っていますし。だから、電話で今日はああした、こうしたという話を聞くだけで、自分もそこに居るような気がして、ぜんぜん寂しくないんですよ」。(まつさん)

以上の事例から、高齢者が地域の内外に多様な回路を持ち、特定の相手に負担が集中しないように、状況によってサポートを頼む相手を使い分けていることが読み取れる。だが、自立した生活を維持するためにはうまくサポートを使い分けるだけでなく、なるべくサポートを受けなくてもすむように自らも努力している部分も見逃せない。

「(雪下ろしは)3年前までは知り合いに頼んでいたんだけど、その人が亡くなったんで、工事をすることにしたの。全部で260万円くらい安くはないですよ。電気代もかさむし。近くに親戚がいるし、近所の人も親切なので、頼めば

43) 田原裕子・荒井良雄「農村地域における老親子関係と空間的距離」老年社会科学21-1, 1999, 26-38頁。

やってくれる人がいないわけじゃないけど、毎年誰に頼もうかって心配したり、周りの人に心配をかけるよりも、自分で解決できることは自分で解決したかったんですよ。（清子さん）

周囲の人に心配をかけたくないからといって経済的負担の大きい融雪工事をした人は珍しいが、少しでも長く自立した生活を続けるために健康管理に非常に気を配っている点ほどの高齢者も同じで、とくに歩くことを大事にしている。IV(2)で述べたように高齢者が頻繁に買い物に出かけるのは、単に必要に迫られてというわけではなく、人と会うためでもあるが、同時に自立した生活を維持するための努力でもある。

「健康のためにね、なるべく歩くようにしてるんですよ。夏は毎日。腰が痛くなるので長くは歩けないけど、パルス（ショッピングセンター）の辺りまでは毎日。天気によってはどうしても冷蔵庫をさらう回数が増えるけど、冬が降ってもなるべく出かけるようにしてるんですよ。（栄子さん）

VII む す び

本稿では子どもと別居している、自然条件が厳しい、生計の手段が場所と結びついていないなど、移動を促す条件を備えた神岡の高齢者がなぜ住み続けているのかについて、ロールズの内側性の概念に基づき、場所との関わりからの視点から検討した。その結果、日常的な生活活動の繰り返しを通じた身体的な内側化、同級生、昔の同僚、同世代の親戚、古くからの近隣などによって構成される「高齢者の社会」を通じた社会的な内側化、人生のさまざまな出来事が積み重なることによる自伝的な内側化の進行を示す状況を読み取ることができた。また、身体的内側性と社会的内側性、社会的内側性と自伝的内側性の相乗効果に関するロールズの仮説に符合するような状況も見出せた。場所の内側化という概念によって場所への愛着と住み続けを説明

しようとするロールズの仮説が、日本にも適用し得るという可能性を示すことができた。

仮説の検証が今後の課題となるが、もし、この仮説が検証されれば、高齢社会の問題の解決に向けて、次のような提案につながる。

1つめは身体的内側性が自立した生活の維持につながりうるという点である。IV(2)aで述べたように身体的内側性が身体機能の低下を補い、外出を助けることによって「神岡でなら、まだがんばれる」という意識につながっていた。こうした効果が一般的に認められるのであれば、現在、行政が提唱している「寝たきりゼロ作戦」、すなわち高齢者を要介護状態にしないことで保健・福祉サービスの適正化を図ろうとする方針を具体化する際に、住み慣れた場所に住み続けてもらうことで要介護高齢者の出現を抑えるという可能性を示すものである。

2つめに、身体的内側性と社会的内側性との相乗効果も見逃せない。充実した高齢期を送るためには、社会とのつながりを維持することが必要であると言われているが、そうしたつながりを保つ場の1つとして近隣や地元における「高齢者の社会」の存在が指摘できた。「高齢者の社会」の1員であることによって社会的内側性が強められると同時に、人と会うために外出するので身体的内側性も強められる。一方、身体的内側性が強いために外出が苦にならず、それによって社会的内側性が強化されるという側面もあり、両者は相乗効果をもたらしている。もし、身体的に内側化しやすい、あるいは内側性を維持しやすい空間を整備することができるならば、外出活動だけでなく、社会参加の促進にもつながることになる。逆に、社会参加がしやすい環境を整えることによって外出活動が促されれば、身体的内側性を維持することができ、ひいては自立した生活を維持にもつながるだろう。

ところで、はじめにも述べたように本稿が取

り上げた神岡の高齢者は、サラリーマン退職者が中心で経済的に自立しており、子どもとの別居志向が強い点で今後の日本の高齢者像を先取りしている。だが、場所との結びつきという点では、そのほとんどが生まれ育った場所や結婚して住み着いた場所に何十年も住み続けていることから、シーモンやレルフが指摘する現代社会において没場所化が蔓延する以前の社会の生き残りといえるだろう。⁴⁴⁾ したがって高度経済成長期に地方から都市への移動を経験し、その後も住宅事情や仕事の都合で居住地移動を経験した人々が高齢者の主流となる時、神岡の高齢者ほどの場所と密接な関係を取り結ぶかどうかは疑問である。例えば、日頭で学んだ都心の高層マンションに転居する高齢者の例や、IV(4)で紹介した清子さんの弟の事例は、場所との結びつきよりも利便性が重視されたケースと解釈することができるだろう。

だが、たとえ場所との結びつきの重要性が相対的に低下し、移動する高齢者が増えたとしても、本稿の仮説が意味を持たなくなるわけではない。自立した生活を継続する上での身体的内側性の貢献や、身体的内側性と社会的内側性の相乗効果は、長年住み続けた場所に限らず、程度の差こそあれどこであっても共通するに違いない。逆に、高齢者と場所との結びつきが自明ではなくなりつつある将来の日本を考えるためには、その結びつきを新たな視点で検討することが課題に加わる。例えば、場所を身体的に内側化するにはどのくらいの時間が必要なのか、身体的内側性を形成しやすい空間づくりが可能なのかといった論点が浮かんでくる。例えば、

最近と呼び寄せ移動や介護移動に踏み切るタイミングが社会的な関心を集めている。できる限り住み慣れた場所で暮らしたほうがよいという意見もあれば、健康なうちに早めに移動したほうが新しい環境に慣れることができよという意見もある。シーモンは、人間は生まれ育った場所に限らず、何年かを過ごしただけの場所であれ、旅行に出かけた先であれ、ある程度の時間を過ごすことによってボディウェアネスを獲得すると指摘しているが、具体的な期間については述べていない。もし、新しい居住地で身体的内側性を十分に形成するために要する時間が明らかになれば、IV(3)で紹介した藤田さんの事例のように、いずれは転居したほうがよいがそのタイミングを計りかねているという悩みを解消する1つの糸口となるだろう。

以上で述べたように、高齢者と場所との結びつきに関する研究は具体的な高齢者問題の解決に向けて地理学が貢献できる重要なテーマのひとつであるが、⁴⁵⁾ このテーマは高齢者問題の具体的なレベルにとどまらず、高齢社会に関するより本質的な議論の場に地理学が参加する可能性を開くという点でも重要であることを指摘しておきたい。すなわち、高齢者の生活の質を守りつつ、持続可能な社会保障システムをいかに構築するかという命題を考えるにあたって、サービス利用者である高齢者の空間的な分布がサービスコストを大きく規定する以上、高齢者の居住の自由がどこまで尊重されるべきかという論⁴⁶⁾ 点は避けて通れず、ここに地理学が貢献できる余地が大きい。居住の自由は憲法で認められた権利であるとはいえ、サービス供給の社会的コ

44) ロールズも前掲16) ①~③の中でアパラチアの高齢者を同様に位置付けている。

45) 早くから高齢者・高齢化社会問題に対する地理学の貢献の必要性を主張したウォーンズはレビュー論文 Warnes, A. M., 'Towards a geographical contribution to gerontology', *Progress in Human Geography*, 5, 1981, pp. 317-341. の中で、高齢者と居住環境との関係はその場所での過去の経験や意識も含めて総合的に理解されるべきものであるとして、前掲16) ①の研究を高く評価している (p. 328)。

46) Rowles, G. W., 'The geography of ageing and aged toward an integrated perspective', *Progress in Human Geography*, 10, 1986, pp. 511-539. では、高齢者の居住の自由がどの程度まで尊重されるべきかという哲学的であると同時に公共政策上の命題に関与することは地理学にとっても重要であると主張している。

ストと効用との間の著しいゆがみは必ずしも容認されるものではなく、現実のバランスの上で合意点を見出すしかない。この問題を議論するには高齢者がいる場所に住むことのコストと効用に関するデータを積み上げていくしかないが、それには高齢者と場所の結びつきが高齢者の主観的満足感に与える影響や、サービス需要に与える影響を組み込むことが必要となる。

最後に、こうした政策論的含意を示唆することの意義についてもふれておきたい。地理学における政策論的議論の乏しさがアカデミック世界における地理学の地位低下と密接に結びついていることを、マーティンはかなり批判的に糾弾している⁴⁷⁾。本稿は人文主義的なアプローチに

よって高齢者の移動という問題に取り組んだものであるが、その背景には、マーティンによる指摘に対してできるだけ応えたいという意図が存在する。本稿が現代の日本社会が抱えている高齢者問題に対する解決策を模索するための礎石となれば幸いである。

【謝辞】 本稿作成にあたり、調査にご協力くださった高齢者の皆様に感謝いたします。また、神岡鉱業、神岡鉱山労働組合、ならびに神岡町役場の抽原誠氏には資料面で大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。なお、本研究には平成10年度日本火災福祉財団ジェロントロジー研究助成金(研究代表者:神谷浩夫)を利用した。

(岡学院大学経済学部)(金沢大学文学部)

Attachment of the elderly to their home places fostered by their insiderness: A case study of Kamioka Town, Gifu Prefecture.

Yuko TAHARA

Faculty of Economics, Kokugakuin University

Hiroo KAMIYA

Faculty of Letters, Kanazawa University

The purpose of this paper is to examine the meaning of 'staying-put' for elderly people in an economically depressed community, focusing upon their emotional attachment to home place as well as their life strategy.

The study area, Kamioka Town in Gifu Prefecture, which was once a prosperous mining town in Japan, is now facing severe depopulation and rapid aging with the closure of its mines. Most of the elderly in this town often receive substantial pensions compared to retired farmers and live independently from their children. In addition, it is physically not easy for the elderly to "stay put" because of the heavy snowfall in winter. All of these conditions seem to encourage them to migrate out of the town. This article, based on in-depth interviews with twenty-nine elderly people, tries to examine the reasons why they do not leave Kamioka Town in spite of such conditions. In a sense, the studied area can be regarded as a forerunner of the aging community in the metropolitan suburbs of Japan, and the study will identify significant

47) Martin, R., 'Geography and public policy the case of missing agenda', *Progress in Human Geography*, 25(2), 2001, pp. 189-210.

policy implications.

In studying meanings of 'staying-put' for the elderly, we rely upon the concept "insideness with place" proposed by Rowles (1986). Based on his study of the elderly in a declining Appalachian community living away from their children, he argues that three types of insideness, "physical insideness", "social insideness", and "autobiographical insideness", can develop close bonds between the elderly and their places, which encourages them to stay in familiar places and thus reinforces inertia. Although the circumstances around the elderly are quite different between Appalachia and Kamioka, they have a lot in common in terms of attachment to place.

The results can be summarized as follows:

Because the CBD of Kamioka is small and the physical structure of the area has remained relatively stable, it is easy for the elderly to maintain their "physical insideness", a 'body awareness' of and physical intimacy with the environment, which has been acquired through everyday life for a long time. With this "physical insideness", the elderly experience no problems when they go out and find no impediment to living independently in spite of their lowering physical abilities.

"Physical insideness" is reinforced by "social insideness", which is developed from being deeply integrated into a "society of the old". Most of the informants had grown up in Kamioka or at least had lived in Kamioka for many years since they were married. When they were young, Kamioka provided good job opportunities for them, compared with the younger generation, because at that time mining was the key leading industry in this area. Therefore, they could maintain a fairly tight social network. This network can be seen as the "society of the old" for them, and promotes a supportive attitude through a shared sense of value. By participating in the "society of the old", the elderly in Kamioka can develop and maintain their "social insideness".

In addition to "physical insideness" and "social insideness", many elderly people in Kamioka have also developed 'autobiographical insideness'. Their life-long experiences in Kamioka often strengthen the close relationship between the lived experience of the elderly and the places they used to visit.

All these three types of insideness intensify the feeling of belonging to places, which would discourage the elderly from moving out of Kamioka. When elderly people experience all three types of insideness, they are more likely to "stay put" in Kamioka than move out.

In a concluding remark, some implications for service provision policies are drawn out. First, it seems quite relevant to use the 'insideness' concept in order to reduce the number of bedridden people and the amount of service needs. Secondly, it seems possible to improve the quality of life of the elderly by making use of the synergy effect between "physical insideness" and "social insideness", since a strengthened "physically inside" reinforces the "socially inside", and vice versa.

Key words : elderly, staying-put, home place, insideness, Kamioka Town, depopulated area, humanistic geography.